

<特集>

天邪鬼日記

最終回

大辻民樹 <放送作家>

「テレビの見方」

今やテレビはもう衰退の極み、瀕死状態である。

現在のテレビの何がいけないのか、いったい今までの何がいけなかったのか…、時代の変遷とかいろいろあるだろうが、まずわかりやすい原因の一つをあげる。

かつてTVディレクター・プロデューサー・あるいはその周囲の放送作家等はスター・花形であった。忙しく、なかなか遊べなかったが、それでも仕事の終わった夜中、わざと台本を後ろポケットにさして六本木のディスコにでも行けば、結構モテた。あの頃、華やかなTV番組は皆の夢の世界であり、そこに出ているスターたちは勿論、それに関わる裏方まで憧れの的であった。従って、AD・アシスタント・ディレクターのなり手も多かった。

ADと云えば、ディレクターの奴隷である。ロケがあれば、タレントとスタッフの宿・食事・移動手段等手配し…取材先の下調べをし…許可を取り…その上でディレクターの傍に控え…番組録りや編集の細々とした作業をこなす。2、3日寝られないのは当たり前、ミスをすればディレクターから蹴りを入れられ、ミスをしなくともディレクターの機嫌次第で蹴りを入れられる。

さらに、信じられないほどの薄給。時給にすれば、コンビニのアルバイトより遥かに低かった。だから今ならブラック企業の典型のような扱いを受けて、当然ADは次から次へと辞めた。それでもディレクターの横暴は変わらなかった。

何故なら、いくらやめても次のADの成り手は、掃いて捨てるほどいたからだ。

掃いて捨てるほどいたから、ディレクターのADへの扱いの酷さは変わらない。何故、奴隷と呼ばれるADにそれ程の志望者があつたのか。一つは、やはり自分の番組を作りたいからだった。ADとは、あくまでもディレクターへのステップ。4、5年ほどのAD地獄に耐え、ひとたびディレクターへと昇進し、さらに一つ二つ企画を成功させれば、後は天国が待っていたのだ。

スターたちに指図をし、自分の好きなように番組がつかれる。正に憧れの国の住人になれるのだ。AD志望者が掃いて捨てるほどいた理由…、もう一つはチャンスが誰にもあったことだ。

当時、エリートと云えば、官僚や大手の商社マン・証券マン・銀行員だが、それらには一流大学を出るしかなかった。テレビ界でも、千人程度から十数人の合格者が選ばれる民放局の正社員はエリート中のエリートであった。だが、実際に番組を創っている者、現場のディレクターは下請けの制作会社と呼ばれる中小企業に所属していた。そして、この制作会社は契約社員を多くとった。「お金も寝る時間もいりません。TVの番組をつくりたいんです」、そう云えば、大抵の制作会社の人事担当は、「あ、そう。じゃ明日からADね。頑張るってね」てなもので、次の日からタレントたちがうようよするスタジオに出入りするようになり、そしてこき使われるのだ。

そう、AD、契約社員採用において大切なことはやる気のみ。学歴も学力も必要ではなかった。その証拠に、ADを経て、ディレクターとなった者の中には、大学を出ていないどころか、中卒と云う猛者も何人かいた。しかも彼らは、数々の人気番組を企画・演出する売れっ子だった。勿論、誰もがそうなれるわけではない。やる気に加えて、企画力・演出力が必要だ。

だが少なくとも、そこに学歴などと云う壁はなかった。AD期間と云う奴隷の時代を一日も早く潜り抜ければ、自らの力を存分に発揮できたのだ。皆、テレビが好きで好きでしょうがない者ばかりだった。

視聴者を面白がらせ、あるいは感動させることに夢中だったし、生きがいを感じていた。

だから、番組自体に力もあったし、全員が全力投球をしていた。番組を子どものように思っていたし、従って些細なミスも許さなかった。

ところが…、最近では、ADのなり手が全くいない。何と、制作会社のADの多くが派遣会社からの派遣された者なのだ。これは、どう云うことを引き起こすのか？

まず、当然のことながらディレクターは以前のようにADを奴隷扱いには出来ない。

無茶をして辞められたら上司として悪い評判が立ち、次になかなかADを派遣してもらえないし、そうなればそれまでADがこなしていた番組制作における細々としたあらゆる仕事を自分でしなければならない。企画演出しながらそれらの業務をこなすのは不可能だ。結果、ディレクターはADをこき使うどころか、気を遣うようになる。

ミスを犯しても怒らなくなるし、昔なら一発蹴っていたところをもみ手をして「大丈夫…大丈夫、ボクが処理しておくから」なんて云い出すことになる。結果、そうやってつくられた番組はゆるく締まりのないものとなる。最大の問題は、派遣されたADには「ディレクターになって番組をつくりたい」と云う夢も意欲もないことだ。要するに彼らはプロのADなのだ。

即ち彼らは番組創りの細々とした業務をこなし、それに見合う対価を手に入ればそれでいいのだ。彼らの場合、大抵一番組契約だから、その番組が終了すれば派遣会社に戻り、また別の番組が始まればそこにADとして派遣される。

かつて、ADはディレクターになる為の教育期間でもあった。しかし、派遣ADに教育しても意味が無い。彼らはディレクターになる気もないし、番組が終われば派遣会社に帰ってしまうの

だから。こうなると、新しい時代の新しいディレクター、新しい番組などなかなか生まれない。テレビ業界自体に活気がなくなる。そもそもADになり手がいないと云うことが問題だ。

それは即ち、TVディレクターと云う職業に魅力がなくなったこと、つまりテレビ番組自体が夢の世界でも憧れでもなくなったと云うことだ。では、昔と今、テレビの何が変わったのだろうか？ その結果、現在のテレビには何が起こっているのだろうか？

「何か書く仕事がいいなあ。でも、小説家になるには才能も自信も根気もない」…、工学部建築学科に属しながら授業にも殆ど出ず、アルバイトと時代小説や推理小説・娯楽本ばかりを読んでいた男が、それでも「何か書く仕事がしたい」と放送作家と云うジャンルを見つけ飛び込んだのが、昭和58年春、一応大学を卒業した23歳の時。以来、四〇年近く放送作家として過ごしてきた。40年…、それは正にこの国のテレビ業界の栄枯盛衰の期間であった。その間、何が起こり何が失われたのか…、具体例を挙げる前に、まず放送作家と云う職業について説明しておこう。

放送作家とは、基本的にはテレビやラジオのような放送媒体の番組の台本を書くものである。但し、その中には大きく分けて三つの形態がある。

一つは、私のように情報・ドキュメンタリーの作家。我々は集められた資料・情報からまずロケの想定台本を書き、ディレクターが撮影を済ませてくると、その出来事の並びをディレクターと検討し、視聴者の興味を惹くように構成する。で、最後にナレーターの読むナレーション原稿を書く。これが基本である。構成作家とも云う。

次は、バラエティ番組の作家。お笑いとかクイズ番組はこのジャンルである。彼らにとって最も大切なのは企画会議。どれだけ斬新で面白いアイデアがあるかが勝負なのだ。お笑い芸人についてブレインとなっている者もいる。従って作家と云いながら彼らはあまり書かないし、文章能力の無い者も多い。が、最も儲けているのは彼らである。アイデアが次々と出てくれば番組の掛け持ちも可能だし、売れっ子ともなれば、その時代のテレビ番組の潮流を決定するほどの力を持つ。三つ目は、ドラマの作家である。これは、説明の必要はないだろう。所謂、脚本家だ。

この三つの形態をひっくるめて放送作家と云う。それぞれはあまり交わることもなく、する作業も全く違う。番組最後のテロップで「構成」あるいは「企画」、「脚本」と云う肩書きで出てくるが、我々構成作家と脚本家は大抵一人の場合が多くバラエティの作家は何人も複数で出てくる場合が多い。では、そんな構成作家を四〇年近く務めてきた私が現在のテレビ番組の問題について語ろう。まず、一番わかりやすいのが視聴率。

私が始めた昭和の終わりから平成の初期にかけて、ゴールデンタイム（19時から22時）と云えば、視聴率20パーセント前後が合格で、10パーセント近くになればもう打ち切りの対象であった。それが昨今では、10パーセント近くが平均、20パーセントも取ればお化け番組とまで云われるほどを褒め称えられる。テレビ番組全体の視聴率が下がり続けているのだ。つまり、テレビを見る人が減り続けているのだ。何故か？

答は簡単、インターネット等他の媒体の普及もあろうが、根本的な理由はテレビがつまらなく、しかも無責任になっていることだ。では、昔と今、いったいどこが違うのか。

少しずつ変わっているから気付かないが、以前と今、切り取って見れば、今は当たり前のように思っただけで見ている、実は大きく変わっていることがある。具体例をあげよう。

例えば、テロップミス。ワイドショーを見ている、司会者がやたらテロップの漢字のミスを謝っている。昔なら考えられないことだ。テロップミスなどして辞めさせられたADは数知れず。多くの人が見るテレビで漢字を間違えるなど考えられないことであった。

だいたい番組で放送されるVTRは、ディレクター・ADは勿論・放送作家・編集マン・ナレーターと多くの者がオンエア前で見ているはずだ。それだけの者がチェックしながら何故そんなミスが起こるのか。もう現場がユルユルなのだ。

視聴者を馬鹿にしているのかと云う編集も多い。衝撃映像やワイドショー等の事件を扱ったもの、「それさっき見たよ」と云うシーンが何度も使われている。特にCM前の引っ張り、フックと呼ばれるもの、「CM明けは、衝撃の〇〇!」とか云う数秒の映像に至っては、5回6回もCMの度に繰り返される。しかも、番組前の宣伝映像でも一週間前から何度も繰り返される。昔ならあり得ないことである。一つの番組で同じ映像を使うことなど、タブーであった。

ディレクターは、その為の一つの事象でも様々な角度から録った。ニュースもひどい。

だいたいニュースにBGMをつけだしたのはいつ頃からだろうか？ 事件や、あるいは式典などに音楽をつけて感情を誘導するなど、許されないことではないか。あるが儘の事実を伝えることこそ報道の基本であろう。

それが、台風が来るとなればわざわざとんでもない地域に女性アナウンサーを派遣し、暴風雨の中に晒し、「キャー、まるで体ごと持って行かされるような風です」なんてやってる。

バラエティ番組ではない。報道だ。知りたいのは、地域ごとの具体的予報であり、衝撃映像で視聴率を取ることはない。事件が起こる度の近所の人々の証言とか、街頭インタビューなんても報道としては無意味だ。

単純に仲が悪かったなんて人もいるだろうから近所の人々の証言ならその周囲のもっと多くの人々の証言を取るべきであろうし、街頭インタビューに至っては、少なくとも何人にインタビューをし、その内の何人がこんな意見を云ったと云う情報がなければ、単にディレクターの意図通りの発言をする人を切り取ったことになるし、その通り、街頭インタビューで紹介される意見は殆ど想像通りのものばかりである。だいたいニュース番組で自らの局主催のイベントなどをあたかも全国的なニュースのように紹介するようになった頃から、テレビ局の報道はダメになった。

ワイドショーを見れば、コメンテーターと呼ばれる席に多くの芸人が座っている。

事件や世の中の風潮などの意見を専門家ならともかく、何故芸人のそれらしい意見を聞かなければならないのか。芸人はその芸で笑わせてくれ。

殺人事件のコメントを深刻な顔をして云うなんて勘弁してくれ。そして、昔と今、比べて見て、最も違うのは、テレビの命とも云うべき映像とコメントの酷さだ。映像は常に揺れ、カメラの振り方も速く、逆光もお構いなし。コメントに至っては、書き言葉と話し言葉の区別もなく、敬語は無茶苦茶、無知をさらけ出した物も数多い。

最近、気になったのは、バラエティ番組でプールに飛び込む様子を「入水」とテロップを入れてまで表現していたことだ。勿論、読みは「ニュースイ」と云っていた。が、

入水（ジュスイ）とは云わずもなすが元々水中に身投げ、つまり自殺することを差す。

そんなことを気にする者がもうスタッフにいなくなったのだろう。もう少し専門的なことを云えば、「風に揺れる野に咲く一輪の花」的なナレーションが多くなっていること。風に揺れる野に咲く一輪の花…、そう書いた者は自分の言葉に酔って視聴者のことを考えていない。

テレビとは映像芸術である。つまり、映像こそメインであり、ナレーションとはその映像を補佐、あるいはその映像をより印象づける為のものである。だとすれば、この場合、「風に揺れる野に咲く一輪の花」とは、映像に映っているその儘を表したものであり、こんなナレーションを入れるなら、同録（現場でのその儘の音）、つまり言葉でなく、風の音をその儘流した方がいい。

もしナレーションを入れるのなら、例えば、「秋…、この地では北からの季節風が吹き付ける」と映像を補助する情報をつけるべきだ。プロなのだから、野に咲く一輪の花などと云う言葉の心地よさに酔ってはいけぬ。さて、いつからこんなことになったのか？

きっかけはやはり平成3年から5年にかけてのバブル崩壊とその後の10年に渡る不況…、「失われた10年」であろう。不況の波は、スポンサーからの制作費に頼っていた民放テレビ業界を直撃した。制作費が大幅に減ったのだ。結果、何が起こったか？ 制作スタッフのリストラだ。

まず、ロケスタッフ。照明班が切り取られ、次に音声班、遂にはカメラマンも排除された。

最近のロケは、ディレクターが小さなカメラを持ち、一人でロケに出るのだ。

従って、映像は揺れるし、逆光も構わないと云う事態が起こる。カメラマンとは、勿論専門職であり、そのプロの技と映像に対する心意気は師匠から弟子へと引き継がれるものである。

それが、あの失われた10年で途切れた。最初の頃は、ディレクターもカメラマンの方が当然イイ映像を撮るがお金がないからしょうがないと云う自覚があるが、カメラマンのいないロケが続くとその次のディレクターはそれが当たり前となり、つまりカメラマンの録った絵と自分の拙い絵の違いもわからなくなる。

同様のことが作家にも起こる。制作費の減少は遂には作家をも雇えなくなるのだ。

で、ディレクター本人が書くようになる。当然のことながら、作家も優秀なプロデューサー・ディレクター、あるいは先輩作家に鍛えられた者だけが生き残っている。つまり、プロである。

しかし、制作費のないせいで仕方なく自分で書いているディレクターでも、第一世代はそのことを自覚している。つまり、作家の文章の方が優れていることをわかりながらも、仕方なく自分で書いている。ところが、作家を使わないディレクターもそれが第二世代、第三世代となると作家の文章と自らの文章の優劣もわからなくなる。結果、何が起こるのか？

ディレクターが傲慢になるのである。で、「野に咲く一輪の花」なんて自らの文章に酔ってしまう輩が登場する。「俺って、ナレーション書かせても最高じゃん」てなものだ。

かつてテレビが憧れだった時代、ディレクターたちの間で凄まじい競争が繰り広げられていた。様々な才能が鎬を削り、優秀なカメラマンや作家は取り合いとなった。

従って、ディレクターはプロの仕事をするカメラマンや作家に謙虚であった。

ところが、テレビの世界が昔ほど憧れでなくなった今、つまりディレクターになるにも昔ほどのライバルもいなく、競争もなくなった今のディレクターの方が自分の才能を過大評価をし、全てに傲慢になっている。「俺って天才だなあ」と本人だけが思っている。こんな者たちの創るテレビが面白く興味深いわけがない。

勿論、現在の番組でも、「凄いなあ、こんなこと思いもつかなかった」、「よくやっているなあ」と感嘆するものもある。しかし、大半は上記の事情で衰退している。

果たして、ネット全盛の時代に、テレビの未来はあるのであろうか？

私が期待するのは、民放の再編である。全体の視聴者が減っているのだから、当然、分かち合うパイも少なくなる。これをかつてのように十分な制作費を取り戻すには、かつての銀行のように合併し、パイの取り分を大きくすることだ。

即ち、例えば「フジ・日本テレビ」、「テレビ朝日・東京放送」が誕生し、地上民放局が、二局か三局になる。こうなれば、ディレクターも昔のように優勝者だけの競争となり、番組自体もアイデアと活気に溢れたものになるであろう。おそらく、現在のテレビはこれほどの大手術を施さなければきっとインターネット番組に取り残され、惨めな最期を迎えることになると思う。

が、果てさて、傲慢になったディレクター・テレビ局員にそれ程の洞察力があるかどうか。

現在の大半のテレビ番組を見ている限り、未来はないような気がする。

じいさんの繰り言ではないが、私は今思う。

「厳しかったけど、なかなかいい時代に育ったものだ」、と。